

2009 - 6

活動名	世代間交流の試み：キッズヘルパーたちの挑戦
要旨	小中学生がキッズヘルパーとしてデイサービスの活動に参加。子供達のやりたいことを生かしつつ、認知症高齢者に関わることで高齢者の力を引き出している。また、子供だけでなくその親にも認知症の理解が広がっている。
応募者	認知症ケア研究所 デイサービスセンターお多福 高橋 克佳
連絡先	〒310-0841 茨城県水戸市酒門町 4637-2

活動名称：世代間交流の試み：キッズヘルパーたちの挑戦

応募者：認知症ケア研究所 デイサービスセンターお多福 高橋克佳

1. 概要

社会保障・人口問題研究所の人口統計資料集 2007 年版では、2005 年の総世帯数に対する 3 世代家族（65 歳以上の高齢者が世帯主である直系 3 世帯以上）の割合は 8.0%と低く、小中学生に代表される子供たちが、認知症を含む高齢者の生活と接する機会がきわめて限定されていることが報告されています。わが国でもいくつかの自治体で世代間交流を目的とした事業が行われていますが、認知症高齢者の理解を目的とした地域活動はわが国ではきわめて乏しいのが現状です。

NPO 法人認知症ケア研究所デイサービスセンターお多福では、一定の条件を満たした小中学生にキッズヘルパーとして土・祝日や夏冬春休みを中心に、デイサービスセンターお多福の活動に参加してもらい、高齢者と子供達が共に同じ時間を過ごし、子供たちが高齢者に対して、子供なりの視線で高齢者と関わり、高齢者も同じように子供たちと関わる時間を作ることを通して、世代間交流の機会を増やし、認知症の有無にかかわらず子供たちの高齢者に対する意識や態度の変化が、子供たちと高齢者の双方にどのような影響をもたらすかを検討するために 2007 年にキッズヘルパーの試みを始めました。デイサービスセンターお多福でのキッズヘルパーは単なるボランティア、お手伝いではありません。一人一人の目標に沿った仕事をしてもらい、疑似通貨ですが、報酬も得ることができます。このことは大きな特徴といえます。

2. 地域の紹介

水戸市は、首都東京から北東へ約 100 k m、茨城県庁の所在地であり、県の中心よりやや東部に位置し、東経 1 4 0 度 2 8 分、北緯 3 6 度 2 2 分の地点を中心に市街地が形成され、地質は低地が沖積層、台地が洪積層よりなっています。

東には大洗海岸、西には筑波や日光の山々、北には八溝や阿武隈の山々、そして南には関東平野の一部を成す広々とした常陸台地が望めます。

市の北側はひたちなか市、那珂市、城里町に接し、東側は大洗町、南側は茨城町、西側は笠間市に接していて、地形は低地地区の南東部、台地地区の中央部、丘陵地区の北西部に分けられます。

寒さのやや厳しい冬期を除いては、比較的温和で、気象災害も降雨による災害を除き比較的少ないものとなっています。

3. 活動の内容および活動成果と展望

当デイサービスのキッズヘルパーは、登録制です。キッズヘルパーを行ってみたい子どもたちは、最初に当センター独自のキッズヘルパー履歴書を記入し郵送します。当センターでは、厳選な選考の結果を採用通知として子供たちに送ります。そして履歴書を送った子供たちは、全員がキッズヘルパーとなります。キッズヘルパーは、子供たちが自分たちで考え参加する仕組みになっています。子どもたちは、ボランティアでは無く仕事に来るといった考えで来てもらっています。そのため履歴書には特技やセンターでやりたいことを記入し提出してもらいます。その中には「おじいちゃん、おばあちゃんと遊びたい」とか「お年寄りの背中を流してあげたい」など子供たちの年齢によって様々です。そのやりたい事や特技は、センターでしっかり披露してもらいますし、やってみたいことは、必ず出来るように職員が配慮します。

初めてキッズヘルパーに来る子供たちには、簡単な場所の説明や器具の使用方法、一日の流れが説明されます。最後に認知症高齢者に対する注意事項を職員が説明します。内容はごく簡単なもので小学生にもわかりやすく説明します。その内容として 認知症は病気であること 認知症高齢者は、忘れてしまうという症状があるということ 認知症の人は、忘れてしまうという症状のために同じことを一日に何度も質問することが多いこと。 認知症の人に聞かれた時は、何回目でも初めて聞かれたように笑顔で返事や応答する事、と説明します。説明の仕方は職員様々ですが、ポイントはこの 4 つになります。これらの決まりや約束事を守りながらキッズヘルパーは、高齢者と関わっていきます。認知症に対する説明は、この後、子供たちから彼らの親に対する説明を通して、認知症高齢者の対応について親の世代も浅い内容ですが理解することに広がりました。これは、キッズヘルパーの取組後に分かったありがたい副産物です。

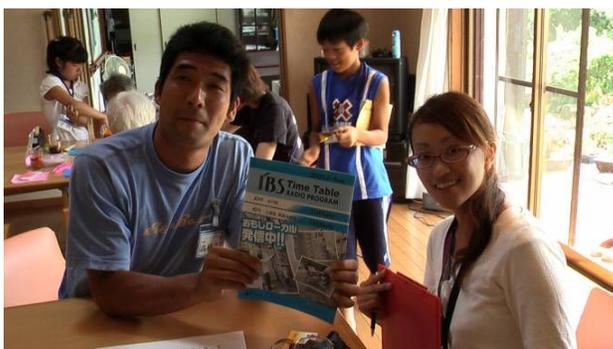
キッズヘルパーの一日は、朝到着する利用者さんのお出迎え、お茶を出したり、体温計を配ってもらったり、体操の準備から一緒に体操をしてもらいお昼の準備などをこなします。もちろん入浴時に背中を流してもらうこともキッズヘルパーの希望があればやってもらいます。そうして一日が終わると記録として感想文を書き一日が終了します。終了時には、10 オッタ(当センターで使える疑似通貨)をもらい帰宅します。(オッタは、当センターでおやつやお昼ごはんなどと交換できる疑似通貨となります。)また、子供たちは、当センターで必ず高齢者と関わらなくては、一日を過ごすことができません。自ら主体的に働きかけをしようと思えば相手の話や希望に耳を傾けなくてはなりません。聴くこと伝えることという相互関係が不可欠になります。子供たちと高齢者は、お互いの話を真剣に聞こうとしています。一時もじっとしていられなかった若年性認知症の人が、子供たちと遊ぶときだけは椅子に落ち着いて座り、目を細めながら子供たちの話に耳を傾けたり、混乱のひどい高度のアルツハイマー病の女性が、職員の子供をちゃんと抱いて見事な子守唄を歌

う様子、なかなか仲間に加わろうとしなかった女性の利用者が子供たちにせがまれて輪に加わるようになるなど、びっくりするような様子がしばしば起こります。子供たちの意識の変化も含めて、一定の成果は得られていますが、このような子供たちと利用者のコミュニケーションは定量化することができません。さらに今後、子供たちと利用者のやりとりの具体的な逐語記録とその時の状況の記録を積み重ねることが必要であり、重要と考えています。

ご参考

最近、取材が多くなりました。これもキッズヘルパーの活動に対し、関心が高まっていることの表れではないでしょうか。とても嬉しいことです。

お多福に茨城放送がやってきました！（2009年8月27日（月））



11時からの生放送に備え、どきどきしながら打ち合わせをするレポーターと管理者。生放送なんて初めてですからね、ドキドキです。



その後ろでこれまたドキドキのキッズ達。急遽、あと2つの放送枠に出演する事になりました(^0^)
キッズヘルパーの女子は8月27日の生放送に出演！男子1人は31日の9時から、男子もう一人は31日の10時から録音での出演です！すごいぞキッズ！！

時間は11時、いよいよ生放送が始まりました。緊張しながら一生懸命話す管理者、それを固唾をのんで見守る利用者様とスタッフ、そしてキッズヘルパー。次はキッズヘルパーへのレポートです。とっても緊張している様子・・・がんばれ！がんばれ！
レポーターの方の助けをかりて、なんとか放送は無事終了しました。お多福キッズヘルパーのこと、更に多くの方に知って頂ける機会を頂き大変嬉しく思っております。

お多福に読売新聞がやってきました！（取材：2009年9月8日（火）掲載：17日（木））

去る9月8日（土）読売新聞がキッズヘルパーの取材にやってきました！

午後1時からの取材に緊張するスタッフとキッズ達・・・お昼ご飯がのどを通りません
(>_<)

予定より早く訪れた記者さん、ちょっとカッコいいお兄さんでした（女性スタッフの感想）

利用者様にお茶を入れたり、肩もみをしたり、一緒に折り紙を折ったりと普段のキッズと利用者様のふれあいを写真にとって頂き、話を聞いて頂いてキッズヘルパーのことよく分かっていただけたようです。



小学生ヘルパー活躍

お年寄り生き生き 勤労教育一助にも

■ 水戸のデイサービスセンター ■

水戸市元石川町のアイサービスセンター「お多福」で、お年寄りの話し相手になったり、肩をもんだりする小学生の「キッズヘルパー」が活躍している。子供たちの勤労教育の一助にもなっているといい、管理者の高橋克佳さん(35)は「お年寄りにも子供にもいい効果が出ています」と手応えを感じている。

お多福は今年7月、ヘルパーの研修事業などを手掛ける取手市のNPO「認知症ケア研究所」(代表理事・六角優子茨城キリスト教大准教授)が、民家を改修してオープン。現在、水戸市や茨城、大洗町の約10人が利用している。

キッズヘルパー制度は7月、高橋さんの考案で始めた。高橋さんが看護師として勤務していた病院を、小学2年の長女が訪れた際、認知症の高齢者の目が変わったのを見て思いついたという。高橋さんは「普段はうつろな目をしていた人



子供たちに肩をもんでもらい、笑顔を見せるお年寄り

が、娘といっしょに生き生きと話をしたいに会話を弾んでいた」と振り返る。現在、キッズヘルパーは小学2~4年の10人。学校が休みの土曜日や休日にセンターを訪れ、お年寄りの肩をもんだりお風呂で背中

を流したりしている。初めのうちは高橋さんの指示を待っていたが、自宅から折り紙を持参してお年寄りと一緒に遊ぶなど、自主性が見られるようになった。子供たちには遊びではなく、仕事であることを自覚させるための取り組みも。キッズヘルパーに採用されるには履歴書を出さなくてはならず、また、一日の終わりに「オッパ」と呼ばれる報酬を受け取る。オッタがたまると、自由時間にセンターのプールなどで遊ぶようにしている。

利用者の1人、中村イヨ子さん(74)は「キッズヘルパーたちのお陰で世界が変わりました」と笑う。普段は根父母とは離れて暮らしている常陸太田市立菅田小4年黒沢仁智君(9)は「おじいさん、おばあさんと話しながら食事をするのが楽しい」と声を弾ませていた。

お多福ではキッズヘルパーを募集している。問い合わせは(050)9・240・1100(入)へ。

利用者様の穏やかな表情、キッズ達の真剣な眼差し素敵でした。
文章もキッズヘルパーについての的確な表現で載せて頂き、キッズヘルパーの活動をより多くの方に知って頂く良い機会をいただきました。新聞掲載当日にもキッズヘルパーの新規申し込みのお電話があった程です。本当にありがとうございました。